

夫婦のディスコミュニケーションから考える男性援助

松本健輔 坊隆史

「先生、妻が離婚と言って家を出ていきました。どうしましょうか。弁護士さんに相談に行ったほうがいいのでしょうか。養育費とかはどうなるんでしょうか」

カウンセリングで夫婦関係を改善中の男性から突然このようなメールが届くことがよくある。妻は『離婚』という言葉で何を伝えたかったのか、夫は妻の『離婚』という言葉にどんな意味を受け取ったのか。このことは夫婦のディスコミュニケーションを象徴するような出来事といえる。今回は夫婦関係のディスコミュニケーションをラポールトークの視点で考えていきたい。

1、 ラポールトークとリポートトーク

当連載の4回目と重複するが、コミュニケーションにはレポートトークとラポールトークの二種類がある。柏木（2011）によると、ラポールトークは情を込めて、相手の関心や共感を喚起するような、詳細で具体的な話し方で、女性に多い。一方、レポートトークは簡潔明瞭で論理的な表現で、男性に多い。筆者の経験でも夫婦関係の危機に直面している男女はこの傾向が顕著であるように感じる。

分かりやすい例を挙げよう。夕食で夫は妻に「今日何があったの」と聞かれて、今日の仕事の内容を詳細に語る。これがレポートトーク。しかし妻は、具体的な内容より、そこで何を感じたのか、何を思ったのかが聞きたい。妻が求めている会話がラポールトークなのだ。ちなみに、この手の話は小さなすれ違

いから離婚の問題まで発展する根深い男女間の問題と言える。夫が何を考えているか分からないという主訴でカウンセリングに来る女性が多いが、その問題の背景には男性のレポートトークのみの会話スタイルがある場合が多い。

2、 ラポールトークとジェンダー

社会人にとって『ほうれんそう』は常識だといわれている。ほうれんそう、つまり報告、連絡、相談だ。それらは、感情や主観を排して、事実を伝えていくことが基盤となる。この場面で情緒的な会話を長くすることには意味がない。なぜなら、その会話は関係を深めるためのものではなく、情報を伝えることに主眼が置かれるからだ。「報告は事実を明確に」これも社会の中でよく問われる能力だが、これもまたレポートトークを求める社会のメッセージといえる。

夫婦関係を主訴とするカウンセリング場面で、よく男性が思ったことを言えずに困っている場面に遭遇する。それを見て妻は「この人病気じゃないですか？」と夫を批判する。事実、「この一週間何か楽しかったことはありますか？嫌だったことはありますか？」と訊ねても何も出てこない。本当に思い出せないのだ。しかし夫に「小さいとき今日こんなことがあって嫌だったとか、あれが美味しかったとか両親とお話ししませんでしたか」と訊ねる。そうすると多くの男性がそういう経験があるという。そこから昔はラポールトークができていたことが分かる。社会の中で男性に「論理的であれ」、「感情に流されるな」、「涙は見せるな」、「弱音は吐くな」というメッセージは今も存在する。それが内在化され、子どもの頃は出来ていたのに、大人になって思いを語れない、伝えられない男性が誕生する。つまり、男性ジェンダーが生み出す特徴なのだ。

子どもの頃、周りに「男の子は泣いたらいけないよ」と言われて感情を押し殺すことを学び、社会人になって「感情的に話すな、もっと論理的に事実だけを伝えろ」と言われて、自分の主観的な会話を改める。そんな努力をしてきた男性にとって、突然、家庭で妻に今まで学んできたコミュニケーションを否定される。「何を考えているか分からない」「人の気持ちがわからない人なのね」と言われ、当惑するのも当然ではないだろうか。

3、 男性の大きな誤解

冒頭で紹介したケースの話に戻りたい。「離婚する」という言葉はレポートトークだと、別れるという決定事項を伝えるコミュニケーションである。しかし、ラポールトークでこれを読み解くと、「離婚したいほどつらい」というコミュニケーションと言える場合がある。つまり、つらさをわかって欲しいというメッセージなのである。

「仕事と私どっちが大切なのよ」というのは、昔のドラマ等で使い古された台詞のように聞こえるが、未だに臨床現場でこの言葉をよく耳にする。それもラポールトークで受けるのかりレポートトークで受けるのかで意味が大きく異なる。妻は「私を大切にしてくれよ」という意味でこの言葉を使うが、夫はそれを言葉どおりに受け止め、本当に仕事を辞めようか、転職をしようかと考える。結果、本当に転職をしてしまい、喜んでもらえると思った夫が妻の落胆ぶりを見て驚くという結果を生む場合すらある。

不倫のケースもこの手の話が多い。夫が浮気をしてしまった場合、妻は離婚したいと主張する。しかし、夫は関係修復のためにカウンセリングに来ていることさえ忘れ、「本気で離婚したいんだ」と傷つき絶望する。それを見て妻は「やっぱりこの人の愛情ってこの程度のものなんだわ」とさらに怒りと悲しみを深める。まさに負のスパイラルである。

4、 ラポールトークの習得の一步先

男女のコミュニケーションのずれに関する議論は従来男性がラポールトークを使えず、結果妻が不満を感じているという図式で語られることが多かったように感じる。そして当然のように、男性がラポールトークを使えるようになることだという結論を想像してしまいがちである。しかし、本当にそうなのだろうか。ラポールトークの習得は本当に大切なことだ。だが、それだけでは足りない気がする。上記の例を思い出して欲しい。男性がラポールトークを使えないことが問題になっているのではない。女性がラポールトークで会話をするということの知識がないか、知っていても頭から消えていることが問題なのだ。その差は小さいように見えて大きい。たとえば、彼らにラポールトークは大切だからとスキルトレーニングをしたとしても、おそらく同じ結果になったのではないだろうか。人はどうしても自分が感じているように相手も感じ、自分が考えるように相手も考えると思ってしまう。

5、 男性援助という視点でラポールトークを考える

私は夫婦カウンセリングの場で、リアルタイムに夫婦間の翻訳活動を行っている。目の前で繰り返されるディスコミュニケーションを一つ一つ止めて、その真意を確認して、誤解をといている。夫婦カウンセリングの大きな意義の一つはまさにそこにあると思う。しかし、全ての夫婦に夫婦カウンセリングをする機会も環境もない。そこで男性援助という視点でこの男性とラポールトークの問題を考えたい。まず、ラポールトークを男性が身につけることを支援することだ。ここで、第三回で坊が紹介した市民講座の話に繋がり、また私、松本が行なっている婚活の男性向けの講座にも繋がる。また、著者二人が携わっている虐待をしてしまった男性向けのグループ『男親塾』でもこのラポールトークの練習を行なっている。それらの試みは、男性がレポートトークと併用して、状況に応じてラポールトークも使えるようになることを支援している。

ここではさらに1つ必須科目を付け加える提案をしたい。それは、女性がラポールトークで話すということを学ぶことだ。結局、ラポールトークを使えるようになっても問題の半分は解決しない。相手と自分との違い、そして相手のことを理解して初めて問題は解決する。

上記の二つの学習を支援することは、今問題とされている多くの事柄の根底に存在する。たとえば DV は男性が上手く女性に気持ちを伝えられず、力で解決してしまうから起きることがある。この解決にはラポールトークの習得が必要だ。また、女性に感情をぶつけられ、全否定されたと感じてやり返し DV になるケースは、女性は否定しているのではなく、悲しい、寂しいなどをぶつけていると理解、つまり男女の差として理解できたら結果は自ずと変わってくる。虐待もレポートトークが上手くいかずに手が出てしまう場合が多く、ラポールトークが使えると、子どもとの関係がよくなり、子どもが言うことをきくようになり虐待は減少するかもしれない。少子化対策の婚活でも同じだ。ラポールトークを使えたら異性との関係が上手く作れる。男女の差を理解できたら、誤解なく話ができて、自分が何をしたら喜んでもらえるのか見えてくる。男性ジェンダーが関係する諸問題に共通しているのだ。脱 DV、脱暴力の支援だろうと、婚活だろうと、日常のコミュニケーションアップだろうと男性にとってラポールトークというテーマを必ず通る。ただ、歯がゆいのは、現状問題が起こってからの回復プログラムやセミナーとしての支援が中心というところだ。今後、それを拡張することはもちろん、より啓発的な活動をし、予防という視点でラ

ポールトークの問題を男性支援に取り入れることが何より重要なのではないだろうか。

最後に

最近、夫婦関係が改善したというご夫婦のお話を聞いた。ある時病院で、夫がアスペルガー障害であるということを知り、お互いにアスペルガー障害の本を読みお互いのコミュニケーションの取り方の違いを学び関係が改善したという。このお話のようにお互いができることをして相互に理解を深めて行く。そんな試みも他方で必要な気がしている。

引用文献

柏木恵子 2011年 父親になる、父親をする 岩波書店